

最終章  
サヨナラノ向コウ  
【チャーリー／現代エンド】

「チャーリーさんと一緒にいたい」

まず、はっきりとその気持ちを伝えた。

「私はチャーリーさんと一緒に、できれば現代に帰りたいの。1人じゃなくて2人で」  
これが私の出した答え。

明治時代にお別れして現代に帰る。

チャーリーさんと一緒にこの時代にやって来たのだから、帰りはもちろん彼と2人で。

「……………」

でも彼は私の提案に即答してはくれなかった。

「……本当に僕と現代に帰りたいの？」

「うん」

「どうしてだろう？」

「どうしてって……私もチャーリーさんも現代人なんだから、そうするのが自然だと思うし」

もちろん明治時代と一緒に生きること、少しは考えた。

その選択は、たぶん間違いじゃない。それどころか、現代に帰ることよりも素敵な選択であるようにも思えた。

この時代には私の居場所がある。

現代に残してきたものすべてと引き替えてもいいほどの幸せがある。

(でも、帰らなきゃ)

思い出せない家族や友人たちに会うためだけじゃない。

心の一番深い場所から、絶えず私に呼びかけている声があった。

その声がなんなのか、知らないままにしておきたくない気持ちがあった。

「芽衣ちゃん。僕は現代人でも明治人でもない。ただの物の怪だよ」

チャーリーさんは、優しく言い聞かせるように続けた。

「僕は人間とは違う。そんな僕と現代で一緒にいるのは、たぶんこの時代にいる時以上に後ろ暗い気持ちになるんじゃないかな」

「……そんなことない。後ろ暗くなんかならない」

私は何度も首を振った。

今、チャーリーさんと一緒にいたいと思う気持ちが、現代に帰ったことで変化するとは思わない。

ましてや後ろ暗いだなんて。

「チャーリーさんも、今夜現代に帰るつもりだったんでしょ？」

「……そうだね」

(だったら私、間違っていないよね?)

いまだに迷いはゼロではないけど、自分なりに考えた上で決断した。

なのに、なんだろう。この不安は。

これで正しいと思ったはずなのに、

なぜか心がざわめく。

(でも、もう……)

「もう、決めたんだね」

うん、と私は頷いた。

私は決めてしまった。

迷いがあってもなくても、もはや下した決断の前ではなんの意味も持たない。

「オーケー、わかった。それが君の決めた答えなら、僕は喜んで力を貸そう」

彼はぽんと手を叩き、にっこりと笑った。

「でも1つ不安なことがあるんだけど」

「なにかな？」

「チャーリーさん、以前私に1カ月経つころには記憶のほとんどが戻ってるって言ったでしょ？」

なのに私、いまだに家族のことも友達のこと、はっきりしない部分が多いんだけど」

「うーん？ それはおかしいなあ」

チャーリーさんは大げさなしぐさで首を傾げてみせた。

「君の記憶を引き出すトリガーがあったはずなんだ。それに気づかなかったのかな？」

（トリガー？）

なんのことやらさっぱりわからない。

「よく考えてみてよ。たとえば……君は現代からこの時代になにか持ち込まなかったかな？」

「そういう物がトリガーになりやすいんだけどなあ」

「持ち込む……？」

私はふと思いついて、風呂敷に包んでおいた制服のポケットを探った。

すると指先に、なにやら冷たいものが触れる。

「あっ……！！」

その物体を取り出し、私は声をあげた。

（ケータイだ）

フリップを開くと、画面に淡い光りが灯って暗証番号の入力欄が表示される。

考えるよりも先に、指が勝手にその番号を押した。

番号が認識された瞬間、頭のなかでバラバラに配置されていた記憶の1つ1つが、やがて静かに動き出す。

アドレス帳に登録された家族や友人の名前。

フォルダの中に収められた友人たちとの写真。

メールに書かれた最寄り駅の名前、学校のこと、担任の名前、好きな本、好きな音楽、好きな映画。

そして――。

『芽衣ちゃん』

頭の中で、誰かの声とする。

(……誰?)

とても懐かしい声。

私はこの声をよく知っていた。

『今日はどうだった? 芽衣ちゃん』

『話してよ、どんなことでも』

(ああ、これは――)

ぼんやりと脳裏に蘇る雑多な部屋。

これは……私の家だ。

自宅の1階では両親が骨董屋を営んでいて、家族が寝静まった頃にここで過ごすのが

私の日課となっていた。

なにをするでもなく、古い詩集を読んだり、蓄音機で音楽を流したり。

時折交わされる他愛もないお喋りは、私にとってなによりも大切なひとときだった。

「今日は学校帰りに、友達と渋谷で買い物したよ」

『ふうん。買い物は楽しかった？』

「うん、楽しかった」

お喋りの相手には、いつも事欠かなかった。

螺鈿細工らでんざいくの筆筒や、伊万里焼いまりやきの壺、紅木の三味線、金彩を施したティーカップ、サファイ

レットのネックレス。

店内にひしめく骨董品たちは、昼は寡黙だけど夜になると饒舌だ。

彼らはいつも、私が夜にやって来るのを楽しみにしてくれていた。

——どうして忘れていたんだろう。

私は幼い頃から、普通の人の耳には聞こえないモノを聞いてしまうことがよくあった。

とくに古くから残っている家具や装飾品、古美術品などの『声』を聞いてしまうことが

あつて……。

そのせいで、同級生から気味悪がられたこともしょっちゅうだった。

『知ってる？ 芽衣っておばけと話せるんだって』

『よくひとりごと喋ってるよね。あの子変わってるよ』

小学校でからかわれるたびに泣いて帰って、1人で部屋に閉じこもって。

両親はそんな私を気の毒がっていたけど、正直な性格の妹は『お姉ちゃんはヘン』だと言って、常に一定の距離を置いていた。

……やがて中学生になり、高校生になった私。

いつからか私は、普通の女の子として生きる処世術を身につけていた。

流行り物を身につけ、ケータイを使い、あたりさわりのない話題をテレビやネットで仕入れて。

日常的に話しかけてくる『彼ら』の声さえ無視していれば、少なくとも普通の女子高生になれることに気づいたのだった。

……でも、胸は痛む。

『彼ら』の無邪気な声を見無視するたびに、罪悪感がつのった。

幼なじみを仲間はずれにしているような罪の意識が、常に私を苛んでいた。

(だから私は……)

せめて、1日が終わるほんのひとときの時間だけは、骨董屋にいる『彼ら』と過ごそうと決めた。

あの部屋にいる間だけは、私は普通の女子高生を演じる必要がなかった。

『芽衣ちゃん、今日は楽しかった？』

『中間試験はうまくいった？』

『元気出してよ、芽衣ちゃん』

つかの間の赦しと、ありのままの自分でいられる場所。

——それこそが、日々を生きる私が築いた一番の宝物だった。

「どう？ 思い出した？」

「……うん」

思い出した。

いろんなことを、少しずつ。

私はずっと、自分が人とは違うことを、引け目のように感じながら生きていた。

『彼ら』の声を身近に感じ、時に愛しく思いながらも、自分が普通ではないことへの後ろめたさを捨てることができなかった。

『普通』でいたいと思いつつも、『普通』になりきれなかった自分が、中途半端で息苦しくて。

……なにより私自身が、こんな自分を持ってあまっていたんだと思う。

「チャーリーさん、私ね」

私は顔を上げ、言った。

「私ね、現代でも『魂依』だったの」

「ふうん？」

「それでね、すごくつらい思いをしたりして……。だって現代では物の怪なんていないのが当然だったし……」

そんな私が、魂依の存在が認められている明治時代にやって来た。

ここでは誰も私のことを『ヘンな子』だと思ったりしない。

怖がられたり気味悪がられたりすることもなく逆に珍重される存在なのだと思った。

「だったら君は、やっぱりここに残ったほうがいいんじゃないの？」

「え？」

「だってこの時代なら、魂依である君を誰もが受け入れてくれる。現代でどんな目にあつたか知らないけど、少なくともここならヘンな目で見られることはないよね？」

そう。チャーリーさんの言うとおりで。

この時代は私にとって居心地のいい場所。

ここでなら、私は私自身のことを自然に受け入れることができる。

「……………」

でも――。

夜空に浮かぶのは赤い満月。

現代で見たのと、同じ月。

「どうしたの？」

ただ黙って夜空を見上げる私に、チャーリーさんは優しく声をかける。

彼は、私が魂依ではなかったら、会話するどころか存在にも気づかなかったはずの人だ。

――今、あらめて思う。

（私、魂依でよかったよ。チャーリーさん）

家族も友人も、骨董屋の『彼ら』も、鷗外さんや春草さんたちも。

すべてが私にとって大切な出会いだった。

人間だとか物の怪だとか、そんなことは関係なしに。

「私……やっぱり現代に帰るよ」

私はもう1度、そう告げた。

「現代にいた時は、たしかにつらい思いをしたこともあったけど……もう大丈夫な気がするの。この時代に来てわかった。私は引け目なんて感じる必要はないってことを。私はただ、普通の人より少し出合いが多いだけなの。それはちつとも後ろめたいことじゃない

くて逆に誇らしいことなんだと思う。だからもう、現代に帰っても大丈夫」

「芽衣ちゃん……」

ようやく気持ちをはっきりした。

この時代に後ろ髪引かれる思いはあるけど、記憶を取り戻したことで覚悟ができた。私はこの気持ちを抱いて、現代で生きていく、と。

「そうか……そこまで決めただ」

どこか感慨深そうに、彼は微笑んでいる。

「だったら僕は、もうなにも言わないよ。」

そこまで君が覚悟してるなら」

(チャーリーさん……)

なんだか急に切なくなつて、私は手元のケータイに視線を下ろした。

久々に触れたケータイはしつくりと手に馴染む。

(でも1カ月も充電してなかったのに、よくバッテリー切れなかったよね……)

満タンのバッテリー表示を不思議に思いながら眺め、私はふと、ケータイにぶら下がっていたストラップを手に取った。

「あれ？」

それは狐の根付けだった。

かなり年季が入ったものらしく、素材の石が黄ばんだ風合いを見せている。

(え？ これって、さつき鷗外さんがくれた……)

私は慌ててポケットから、鷗外さんの神楽坂土産を取り出した。

2つの根付けを並べ比べてみると、間違いなく同じ物だ。

ただ、ケータイに付いていたほうはかなり変色してしまっているので、すぐに同じ物だとわからなかった。

(なに、これ……?)

一瞬にして、全身の肌が粟立つ。

どういうことなんだろう。

このケータイが私のものということは、この根付けも私のものだったはずだ。

「どうしたの？」

「あっ、チャーリーさん、これ見て。さつき鷗外さんからもらった物なんだけど、私のケータイにも同じ物がついてるの」

そう説明すると、チャーリーさんも驚いたのかしばらく無言で目をしばたかせていた。

「いやあ、すごい偶然だ」

でもすぐに、いつもの表情に戻る。

「まあこのタイプの根付けは、昔からよくあるものだからね。世界に1つしかないものならともかく、そうじゃないならただの偶然じゃない？」

「……それはそうなんだけど」

つい、しげしげと根付けを見比べてしまう。

そんな私に、チャーリーさんは『そろそろ時間だよ』と言った。

黒い箱の蓋が開けられる。

私をこの時代に運んだ、あの黒い箱だ。

「さあ、入って」

「………」

私は1歩踏み出し、用意された黒い箱の中身を見下ろした。

タネも仕掛けもなにもないはずの箱。

虚無への入り口みたいに真っ暗だ。

入るのに一瞬とまどうほど。

(なんか、怖い)

現代に帰ると決めたのは私自身なのに、このごに及んで躊躇ちゅうちよするのはどうしてだろう。

「どうしたの？」

「……ううん」

言いしれぬ不安をどう口にしたらいいかわからないまま、私は箱のへりに片足をかけた。

（本当にいいの？）

わからない。わからないけど、決めたなら行かなくちゃ。

（行かなくちゃ……）

「……ねえ、どこ行くの？」

——箱の中に片足を入れた、その時だった。

背後から、予期せぬ人物の声がしたのは。

「どこに行くのかって、聞いてるんだけどさ」

「鏡花さんっ？」

「……………」

赤い月を背後にたずさえた鏡花さんは、どこか責めるようなまなざしで私を見ている。

そして、ゆっくりとチャーリーさんに視線を移した。

「やあ、鏡花さんじゃないか。いつも芽衣ちゃんがお世話になっているようだね」

チャーリーさんはいつものスマイルで帽子を取り、仰々しい動作で一例した。

「ああ、ちょうどいい。これからとっておきのマジックを披露しようとしていたところなんだ。よかったら見ていってよ」

「……あんた、この子をどこにやるつもり？」

鏡花さんの様子がいつもと違う。

たしか鏡花さんは、松旭斎天一のファンだったはずだ。

こんな状況に居合わせたら、喜んでマジックを見学していくだろうと思ったのに。

「あんた、この子の付喪神つくもがみかなんかだろ？自分の主をどこにやろうとしてるんだよ」

(……え？ 付喪神？)

私が疑問を返す間もなく、鏡花さんは続ける。

「まさか松旭斎天一が物の怪だったなんてさこの前の鹿鳴館で初めて気づいたよ。……

魂依の僕がすっかりだまされた。それは素直に認めるけどさ」

そこでいったん言葉をきり、彼は1歩チャーリーさんへと踏み出した。

「なんでこの子に不安そうな顔させてるのさ？気に入らないね、主に対するその態度」

「鏡花さん、違うんです。私が頼んでやってもらってることなんです」

「はあ？」

「……その、つまりマジックですね、私を生まれ故郷に飛ばしてもらおうとしていまして……」

「はあっ？」

(どうしよう。なんて説明したらいいんだろ)

この状況をどう説明するべきか言いよどんでいると、

「あんた、どれだけ面倒くさがりなんだよっ！故郷に帰りたきゃ俵でも汽車でも使えばいいだろっ!？」

思いきり怒鳴られてしまった。

「物の怪を足代わりに使うなんて、いったいなに考えてるのさ！まったく、あんたって筋金入りの凶々しさだね！ここまで徹底してると逆に尊敬するよっ」

……どうやら私は、タクシー代わりに物の怪パワーを利用する不精者だと思われているらしい。

「いえ、あの、決して移動を面倒くさがっているわけでは」

「そんなに気軽にさあ、物の怪の力を使ってやるなよっ。使う力が大きすぎると、物の怪自体が消えてなくなっちゃうこともあるんだからなっ」

「――え？」

私は、はっとして鏡花さんを見上げた。

(物の怪自体が消える?)

どういうことかよくわからない。

そんな話は初耳だった。

「ねえ、わかってるのかよ？物の怪はさ、主のためならどんな無茶でもしてしまうもの

なんだ。あんたが今すぐ日本最北端に行きたいって言えば、そいつは喜んであんたを送り出すよ。自分の存在と引き替えにね。……そうだろ？」

「……………」

チャーリーさんは少し間を置いてから、にっこりと笑う。

「はは、やだなあ。僕はそこまで非力ではないよ」

「なんだよ、じゃあ日本最北端ぐらい余裕で飛ばせるっていうのかよ」

「日本最北端どころか、世界最北端でも大丈夫じゃないかな。以前ペンギンを南極から取り寄せたこともあるからねえ」

「……以前はできたかもしれないけどさあつ、また次もできるかどうかはわからないだろうっ？」

「できるさ。今から彼女が向かう場所は、ここから目と鼻の先の距離なんだ」

「は…………？」

（違うよ、チャーリーさん。目と鼻の先の距離でもなんでもないよ）

同じ東京内でも、明治から現代ではすごくすごく遠いと思う。

たぶん北極や南極よりも。

時代を超えて人を移動させるのは、南極のペンギンを呼ぶことよりも、遥かに大きな力が必要なんじゃないかと思った。

「それに、そもそも芽衣ちゃんを現代からここに飛ばしたのは僕だろう？でもご覧のとおり、僕は消えたりしていないけど？」

「……………」

それもそうだ。

私をこの時代に飛ばしたのは、ほかでもないチャーリーさん自身。

(でも1回ならともかく、2回もそんな力を使って大丈夫なのかな……)  
考えれば考えるほど、大丈夫じゃない気がしてしまう。

「あんたたち……いったいなんなんだよ？」

すると鏡花さんは、私とチャーリーさんを交互に見て怪訝そうに問う。

「さっきから『この時代』とか『現代』とか、いったいどういう意味？」

「……それは」

説明できずにいる私に、鏡花さんはさらに言葉を重ねた。

「まさか本当に、俵や汽車では行けないところに帰るつもりなんじゃないだろうね。どうなんだよ？」

「大丈夫だよ、芽衣ちゃん」

さえぎるようにチャーリーさんは言う。

「僕を信じて。君はなにも心配しなくていい。ちゃんと現代に帰してあげるよ」

もちろん信じてる。チャーリーさんが私を現代に帰してくれるってことは、でも私が望んでいるのは、1人で現代に帰ることではなく、2人一緒に現代に帰ること。

——ずっと拭えなかった不安の種は、これだ。

私の中で、チャーリーさんと現代で再会できるイメージが描けなかった。

『3、2、1』と唱えたが最後、もう2度と会えないような気がしてしかたなかった。

「……チャーリーさん。私たち、現代でも会えるよね？」

焦燥感にかられてたずねると、彼は普段どおりに微笑んだ。

「追いかけるよ、すぐにね」

「本当に？」

「うん。さあ芽衣ちゃん。時間がないよ、準備はいい？」

（準備？ ……準備なんてまだだよ）

私はまだ、チャーリーさんに約束してもらっていない。

『現代でも会える』と。

『現代でも一緒にいる』と——。

「3」

「っ！ ちょっと待ちなよ、ねえっ」

「2」

(……嫌だ)

「1」

(嫌だ、チャーリーさん！)

「さよなら……芽衣ちゃん」

——パキッ。

なにかが割れる音とともに、私の意識が、闇のなかへと弾け飛んだ。

\*

『——芽衣ちゃん』

……ここはどこだろう。

まるで夢のなかみたいに、ふわふわと身体が浮遊する感覚。

薄暗い空間の中から、誰かの声がある。

『今日はいつもより帰りが遅かったね』

『どこに行ってたの？』

——そうだ。

これはいつもの『彼ら』との会話。

あの骨董屋で過ごした、私たちだけの秘密の時間。

「うん、実はね、友達との買い物帰りにお祭りに寄ったの」  
くすくすと、さざめく笑い声。

「そこにヘンな奇術師がいたの。箱の中に入れた物を、きれいさっぱり消すとか言い出して……」

(奇術師?)

私はふと、我に返った。

なにかが足りない。

いつもそばにいてくれた、

なにかが欠けている。

「……どこに行っちゃったの?」

私の問いに、それまで饒舌だった彼らはいっせいに口をつぐむ。

まるで最初から、物言わぬモノであったというように。

(……足りない。足りないよ)

しだいに視界が狭まり、足もとがぐらりと傾ぐ。

やがて私は、なにかを強く握りしめていたことに気づいた。

ゆっくりと手を開くと、

(あ……！)

そこには、真っ二つに割れた狐の根付けがあった。  
私がつつもケータイにつけていた、あの根付けだ。

「なんでっ……」

無残にも割れてしまったそれを呆然と見下ろし答えを乞うようにして再び周囲を見回す。

けれどもやはり、返事はない。

(どうしよう……)

だって、この根付けが割れてしまったら――――。

『泣かないで、芽衣ちゃん』

『笑ってよ、芽衣ちゃん』

……チャーリーさんは、戻らない。

姿は見えなくても、私を優しく励まし続けてくれた声。

ランドセルにつけた狐のお守り。

――そう。

あの人は、物心ついた時から、私の小さなお守りだった。

いつも私のそばにいてくれた狐の根付け。

この『付喪神』こそが――チャーリーさんだったのに。

(……チャーリーさん。教えてよ)

(どうして私を明治時代に連れていったの?)

(どうして私を、あの時代に留まらせようとしたの?)

手のひらの上にある、割れた狐に聞いてみても答えはない。

まだまだ聞きたいことがたくさんあるのに。

まだまだ話し足りないことがいっぱいあるのに。

このままじゃ、1人で現代には帰れない。

(どこにいるの?)

(教えてよ)

(誰か……)

行き先の見えない闇のなかで、私は立ち止まる。

「……チャーリーさん」

狐の根付けを両手で握りしめ、祈るように。

「チャーリーさん……っ!」

見えないどこかに向かって、私はチャーリーさんの名を叫ぶ。

声は闇に吸収され、響かない。

けれども、

(え……?)

立ち往生する私に向かって、なにか白いものが駆け寄ってきたのは、その時だった。

——ぴよんっ。

白いボールのようなものが、風の如く私を通り過ぎて走って行く。

よく見れば、それはボールではなく長い耳を揺らした白ウサギだった。

暗闇の中で唯一の白さを誇示するそれは、まるで雲間に射した光のように長く、遠く

へと一方向を走り示していく。

(な、なんでこんなところに鏡花さんの白ウサギが?)

私は弾かれたように走り出し、白ウサギのあとを追った。

やがて音もなく、色もなく、風もない暗闇の世界に、小さな光が灯り始める。

蒼い闇に浮かぶ白亜の館。

煉瓦街を彩るガス灯の光。

地面を蹴る馬車。

繁華街を照らす提灯の連なり。

空を貫く12階建ての塔——。

目まぐるしく過ぎるのは、今となってはもう、ずいぶんと遠くなってしまった懐かしい景色たち。

その景色のなかで、私をよく知る人々が笑いかける。

(あれは……)

「おや、子リスちゃん」

「そこの娘サン、なにかお困りですか？」

「君のことだよ。ほかに行くところないんだろ」

「誰が帰っていいと言った」

「まあ元気出せ。俺でよけりゃ、いつでも相談に乗ってやるからよ。じゃあなっ」

……行き先を明るく照らすように、大きく振られる手。

白ウサギは先に行く。

だんだんと光量を増す方向へと――。

「あんたさあ、あの付喪神の主なんだろ？ だったら少しは信じてやれば？」

やがてこみあげる涙を拭いながら走る私へと怒声が降って来た。

「ああもう！ 泣いてないで、とっとと帰りなっ言ってるんだよ、このグズ！」

\*

「——っ！」

誰かに怒鳴られ、私は目覚めた。

高い声が鼓膜に残るのを感じながら、身体を起こし、ごしごしと目をこする。

少し埃っぽい匂い。ぼんやりと灯るランプ。

飴色に輝くテーブルの艶。

視界に入る物は、どれも見覚えのある物ばかりで、私は呆然としながら周囲を見回した。

「ここは……」

私の家だ。

私が生まれ育った、現代の自宅だった。

（私……帰ってきたの？）

確かめるように思いきり深呼吸をする。

馴染みのある自宅の匂いに、たちまち身も心も安堵で満たされていく。

久しぶりに見た1階の店内は、なに1つ変わっていない。

とても1カ月経ったとは思えないほど、変わり映えのしなさすぎる光景だ。

「……………」

(なんだろう。帰ってこられて嬉しいのに)

私は明治時代ではなく現代で生きると決めた。

自分で決めて出した答えなのに、もうすでに明治の空気が恋しくて、この場から動けない。

「チャーリーさん……」

手の中に残る狐の根付けは、やはり2つに割れたままだ。

その無残な姿を見ていたら、なにか取り返しのことかできないことをしてしまったような気がして不安になった。

「チャーリーさんってば」

出てきてほしい。今すぐに。

私の一番の望みは、1人で現代に帰ることじゃない。

2人で現代に帰ること。

それができなければ意味はないのに。

「チャーリーさん」

私は根付けを握りしめながら、何度も名前を呼んだ。

「チャーリーさん。チャーリーさん」

薄暗い部屋の中で、私のむなしい声だけが響く。

(お願い。出てきて)

「チャーリーさん……」

何度呼んでも。

何度叫んでも。

彼は私の声に、答えてはくれなかった――。

次の日も。その次の日も。

チャーリーさんは私の前には現れなかった。

不思議なことに骨董屋の『彼ら』も、私が明治時代から帰ってきたその夜から言葉を一切発していない。

どんなに耳をすませてみても彼らの声は聞こえなくて、私は無言のまま、1人で骨董屋での夜を何日か過ごした。

もしかすると私は、凶らずも、ごく普通の女子高生となってしまったのかもしれない。

あのおかしな能力がなくなってしまったのかもしれない。

それが嬉しいことだとは思わなかった。

――ただただ、私は1人ぼっちだった。

——その日は、やけに明るいい夜だった。

すっかり遅くなってしまった学校帰り、私は立ち止まり、ふと空を見上げる。

(赤い……)

夜空にぽっかりと浮かぶ満月は、まるで夕陽のように赤い。

作りものめいた満月だ。

(あれから、もう1カ月経っちゃったんだ……)

明治時代から帰還し、ごく普通の女子高生として日常に復帰した私。

毎日は平穩に過ぎ、あのきらびやかな明治での生活も、私のなかで少しずつ思い出に変わりつつあった。

……こうやって夜道を歩いていると、どこからともなく祭り囃子が聞こえてくるような気がする。

期待半分でなにげなく公園を覗いてみたりもしたけれど結局どこにもお祭りの気配はなく、そのまま自宅にたどり着いたのだった。

その夜、私はいつものように骨董屋の店内にいた。

ここにはもう、かつてのように私とお喋りをする相手はいない。それでも長年の習慣が身についてしまっているのか、夜は必ずここで宿題をしたり読書をしたりして過ごす。

そうしなければ落ち着いて眠りに入ることができなくて今夜もいつものようにひっそりとランプを灯し店内の本棚にあった詩集を読んでいた。

それは島崎藤村しまざきとうそんの詩集で、タイトルは『若菜集』。

明治時代の男女の恋をつづった詩集らしい。

ぺらぺらとページをめくり、なぜか『狐のわざ』という題名の詩が気になって、私は指を止めた。

(……庭にかくるる子狐の、人なきときに夜いでて)

教科書に載っていたのか、たまたまどこかで読んだことがあるのか。

なんだか妙に懐かしい詩だった。

(恋は狐にあらねども、君は葡萄にあらねども……)

「恋は狐にあらねども、君は葡萄にあらねども……」

(ん?)

「人しれずこそ忍びいで、君をぬすめる吾心」

「えっ!?!」

私はすつとんきような声をあげながら、がばつと立ち上がった。

ランプの光が逆光となり、目の前に怪しいシルエットが浮かび上がる。すらりとした燕尾服に帽子。片眼鏡。

そんなふざけた恰好をした男を、私はほかに知らない。

「チャーリーさん……？」

「いやあ、いい詩だよねえ。僕のテーマソングならぬテーマポエムだよ」  
そう言って、彼はにっこりと笑った。

あの、どうしようもなくうさくさい、愛しい笑顔で。

「……なんで？ どうして？」

思いがあふれすぎて言葉にならない。

鼻の奥がツンと痛くなって、すぐに視界がぼやけた。

そんな私に、チャーリーさんはうやうやしく一礼してから、大きく両腕を広げてみせる。

「会いたかったよ、芽衣ちゃん」

「……っ」

本当に待った。もう待ちくたびれた。

この1カ月、あてもなく待ち続ける日々がどれだけつらかったか、きっとチャーリーさんにはわからないだろう。

ありとあらゆる文句をひとまず呑み込み、私は無言のままスリッパを脱いで、

「ゲフッ！！」

チャーリーさんの顔面めがけて全力で投げつけた。

「は、はは、1カ月ぶりの再会でいきなりスリッパにキッスを強要するとは。なかなか激しいじゃないか芽衣ちゃんっ……それでこそ僕が主と決めた人だよっ……!」

「遅いよ! ばかっ……!」

涙でぐちゃぐちゃになった顔で、私は勢いよくチャーリーさんに抱きついた。

固い胸板がおでこにあたる。

スカーフのやわらかい感触。

燕尾服越しに伝わる体温。

夢でも幻でもなく、きちんと実体があることをまず確認した。

気のすむまで確認してから、あらためて力いっぱい抱きついてみる。

「私、てつきり、チャーリーさんが消えちゃったのかと思って……あの根付けが、割れちゃったからっ……」

「うん。僕もまさかこっちに帰ってこられると思わなかったから、ちよつと手間取っちゃって」

待ち合わせの時間に10分遅れたぐらいの調子で、チャーリーさんは気軽に遅刻の理由をまとめた。

「僕のこと、待っていてくれたの?」

声にならず、私は何度も頷いた。

もしチャーリーさんを失うとわかっていたら私はきつと現代に帰ることを選ばなかった。

だから私は、現代に帰ってきたことを何度も後悔した。

何度も何度も自分を責めた。

「そうかあ……。しかし、ことごとく僕の予想はずれるなあ」

「……どうということ？」

「だって君、絶対あっちに残りたがると思ってたんだよ。君は魂依だから、現代よりも明治のほうが居心地がいいだろうし……。そう思って僕も、君を明治に飛ばしたんだけどなあ」

「……………」

(なにそれ。じゃあ私が明治に飛ばされたのはマジックの失敗なんかじゃなかったの?)

私は不思議に思いながらチャーリーさんを見上げた。

「チャーリーさんは、最初から意図的に私を明治時代に連れて行ったの？」

「うん、そうだよ」

あっさりと彼は頷いた。

「でも君は明治で生きることを選ばなかった。まったく、なかなか予定どおりにはいか

ないよねえ。人生って」

ヒトではなく物の怪であるにも関わらず、彼はそんな台詞を嘯いてため息をつく。

(……そうだよね。チャーリーさん、最初から私に明治ライフを満喫させたがってたもんね)

今思えば、すべては私に明治時代での生活を選ばせるための言動だったんだろう。

おそらくは——魂依である私が、現代で生きづらそうにしていたから。

魂依が珍重される明治時代のほうが、私が幸せになれるだろうと、きっとチャーリーさんは思ったに違いない。

(じゃあチャーリーさんとしては、私が明治に残ったほうが幸せだったんだよ)

私がチャーリーさん以外の誰かと一緒になって明治に残ることを選ぶのが、彼にとってベストな展開だった。

私が幸せに生きることが、チャーリーさんのなによりの望みだったからだ。

(なんて勝手なことを……)

だって私は、チャーリーさんを好きになってしまったから。

人間でもなく、明治時代の住人でもない、傍観者を決め込むつもりだったはずの彼を好きになった。

そして2人で、ともに現代で生きることが望んでしまった。

つまり私は、チャーリーさんの期待をことごとくはずす方向に行き着いてしまったわけ。  
けで。

「……ごめんね、チャーリーさん」

私は言った。

期待を裏切ってしまったことに対して謝ったわけじゃない。

明治時代にいる間、私はチャーリーさんのことを忘れていた。

幼い頃からずっと一緒にいた彼のことを、少しも思い出すことができなかった。私は

そんな自分自身に失望したのだ。

「ずっと思い出せなくて、ごめんね」

チャーリーさんに言いたいことは山ほどある。

聞きたいことも、知りたいことも、まだまだたくさんある。

でも今は、再びこの時代で会えたことを純粹に喜びたい。

私に会いに時空を超えてくれたこの人を、喜んで迎えたい。

物心ついた時から私のお守りでいてくれた、チャーリーさんのことを。

「会いたかった。1カ月間、ずっと」

チャーリーさんの大きな手が、私をぎゅっと抱き寄せる。

まぶたに落ちたキス。

頬を伝う涙を、唇ですくい取られる。

「僕も会いたかったよ。……100年以上、ずっとね」  
そう私に囁いた唇が、唇に触れた。

時刻は真夜中――。

私とチャーリーさんはアンティークのソファ―に並んで座り、眠らない夜をすごしている。

隣から伝わってくる温もりに、私は安心して身を任せていた。

蓄音機から流れてくるメロデー。

私たちのいる部屋は、穏やかな空気で満たされている。

「……へえ？ それで、テストの結果はどうだったの？」

チャーリーさんはそう言って私の顔を覗き込む。

「それは……」

口ごもる私を見て、チャーリーさんはくすつと笑った。

「はは、どうして黙るのさ。別にいまさら隠さなくなたっていいじゃないか。じゃあ数学は聞かないから、歴史だけ教えてよ。君は昔から、歴史の成績だけは結構よかっただろう？」

「さすが骨董屋の娘だけあるなあって、みんなで感心してたんだよ」

「みんな、って……？」

「うん、君も知ってる……そこにある掛け軸や、伊万里焼の壺、鏡台の付喪神たちだよ。いつもここで、夜遅くまで話してたね」

どこか懐かしむような顔をして私を見つめている。

「早く寝ないと明日遅刻するよって言うのに、君はなかなか自分の部屋に戻ろうとしなくて。ちょうど今みたいに、空がうつすらと白んで……明けの明星が昇るまで。僕らの声が聞こえなくなるまで、毎日いろんなことを話してたっけ」

そう言いながら、チャーリーさんはソファアールからそっと立ち上がった。

ゆっくりと温もりが離れていき、ふと寂しさが込み上げてくる。

「さてと……」

チャーリーさんは蓄音機の前に移動し、レコードを止めた。

その背中を見つめながらそっと唇を噛む。

……だってこれは、お別れの合図だから。

「そろそろ時間だ。今日こそ早く寝ないとね。毎日朝まで起きてるようじゃ授業にも差し障るし、なにより健康によくない」

「あと、もう少しだけ……」

「うん。できれば僕もそうしたいよ。でも、君はただでさえ食生活が偏り気味なんだか

ら、せめて睡眠くらいはしっかり取らないと」

チャーリーさんは私のそばまで戻って来ると、その場に片ひざをつき、私の手をとった。

「……ほら、部屋に戻ろう？」

「……」

「そんな悲しい顔しないで。大丈夫、また明日も日が沈めば会えるんだから。必ず会いに来る。約束するよ」

「本当に？」

「ああ。だから笑って、また明日……って、言つてよ」

私の顔を覗き込みながら、優しく穏やかな声で言った。

「……」

離れがたいのは、チャーリーさんだって同じはず。

それがわかっているのに、私はチャーリーさんから目をそらす。

いつから私は、こんなにわがままになってしまったんだろう。

「……やれやれ。君って子は。まあそっちがその気なら、こっちにも考えがあるんだけどね」

そう言って、チャーリーさんは私のひざ裏と背中に手をそえると、そのまま抱き上げ

た。

「きゃっ。チャ、チャーリーさん、ちよっ、降ろして！ 降ろして！」

恥ずかしさのあまり、チャーリーさんの腕の中でジタバタ暴れてしまう。

「ほら、暴れない。しかたないだろう？ 君が自分で部屋に戻らないなら、僕がこうやって抱き上げて連れて行かないと。……シーっ。静かに。騒ぐと家族が起きちゃうよ」

耳もとで優しく囁かれ、私の身体はぴくりと跳ねた。

高鳴る鼓動をおさえつけ、チャーリーさんの顔を見上げて睨みつける。

そんな私の反応に満足したのかチャーリーさんにはっこり笑い、私を抱きかかえたまま、階段へと向かう。

「ふふ、観念した？ しかしおかしいなあ、君って明治時代にいた頃は、もう少し頼もしく見えたような気がするんだけど……」

「た、頼もしいって……」

「本当だよ。もし君があのまま明治に残っていたら、警視庁妖邏課にでも所属して大活躍してたんじゃないかな」

「まさか……」

そう答える私を見て、チャーリーさんは少しだけ寂しそうに微笑む。

「警察だけじゃないよ。君を必要としている人はたくさんいたはずだ。たとえば、化ノ神

に悩まされている小説家や日本画家……。物の怪好きで日本研究家に、竜神に魅せられた舞台役者と、魂依の目を持つ戯曲家……」

(それって……)

私はあの時代で出会った、大切な人たちのことを思い浮かべた。

「君がどんな道を選んだとしても……必ず意味はあったと思うんだ。仮に今とは違う選択肢を選んだとしてもね」

チャーリーさんは私をベッドの上まで運び、そっと横たわらせた。

そしていつものように、私の髪の毛を優しく撫で——私の額に口づけを1つ落とし、耳もとに唇を寄せた。

「……ふふ。僕が今、どれだけ幸せかなんてきつと君にはわからないだろうね」

「僕がこうして、君に触れられるのをどれだけ夢見たか……」

「……っ」

切なさを含んだ声音と、その内容に私の胸の奥が甘く疼く。

チャーリーさんは私の唇を指先でなぞると、そのまま深く口づけた。

「……こうして、何度君に口づけたいと思ったか。そんなこと、君は少しも知らなかっただろう？」

「ん、……っ」

身体の芯に熱をとすキスが何度も降り、もうなにも考えられなくなっていく。

「……知られなくてもよかったんだ。ずっと胸に秘めたままでもよかった。……でも、1度こうして触れてしまったら。僕が君のことを、どれだけ愛しているか……どれだけ長い間、君を思い続けてきたか……。今まで君に触れられなかった分、思い知らせてあげたくなっただ」

チャーリーさんの言葉に、私の胸は切なく震える。

こんなにも深く愛されていることが、怖いほどに幸せで――。

「……ほら、もうじき朝が来るよ」

軽くついでばむような口づけ。

唇を離してから、チャーリーさんは小さく微笑む。

「今のは、おやすみのキス。次は君から、さよならのキスをしてよ」

恥ずかしくてためらっていると、彼は困ったように眉をひそめる。

「ほら。早くしないと、君に触れられなくなってしまうから……」

そう言われると、もう逆らえない。

私はチャーリーさんの顔を引き寄せると、唇を重ねた。

「……ありがとう。それじゃあ、また明日3、2、1……。……おやすみ」

部屋の中に少しだけ差し込んだ朝日。

チャーリーさんの身体は徐々に輪郭を失い……やがて消えた。

さみしくないとさえ言えれば嘘になる。

だけど、次の夜がくれば再び愛しいあの人に会えるから。

わずかに残るチャーリーさんの温もり。

それが消えてしまわないうちに私は眠りに落ちた。

）  
F  
I  
N  
（